

## 大通公園を望む窓辺から

### 情報伝達は難しい

副会長 藤原 秀俊

「北海道医報〇月号のとじ込みに、チラッと入っていたが…」これはある会議で、某先生がまじめに発言した内容です。また他の会議で他の先生から「この内容はこれから送って来るんですよね」と聞かれました。両先生とも大変まじめな先生で、いつも北海道医報を読んでいただいている事が良く判ります。道庁主催の会議は、2～3ヵ月前に日程調整表がメールで送信されます。それに対して、メールあるいはファックスで返信を行います。日程が確定する前に、委員長や副委員長には再度日程確認メールが来ます。こちらからは了解の返信をします。その後全委員に会議の予定が決定した旨連絡が来ます。当然私にも来ます。ですから私は3度やり取りをすることになります。この位やり取りをすると確実に情報が伝達されます。

北海道医報で発信するためには、まず文書を作成します（大概是担当部長が担当事務職員と相談して決めます。まれに副会長が事務職員と相談をして作成する場合があります）。その後管掌副会長が確認し、会長に見て頂き、情報広報部担当理事会を経て、北海道医報に掲載します。その文書を会員の方々に読んでいただき、情報が伝達されます。しかし、会員の皆様にどの程度周知されたかは不明です。従って重要事項に関しては、北海道医報に掲載する前に、郡市医師会宛に連絡を行い、その上で医報に掲載と言う手続きを取ります。

さてそれでも前記のような事が生じます。8,400名弱の会員に電話で連絡する、その上でメール送信する、さらに医報で伝達する。そうすればかなりの会員の方々に情報伝達ができます。しかしそのためには多数の職員が必要になります。大昔にFAX送信後、「FAX着きましたか？」と言う電話をしたと言う笑い話がありましたが、そんな感じでしょうか。会員の皆様に確実に情報伝達をする良いお知恵がありましたら拝借したいと思います。ご提案をお待ちしております。

### 我家に住める有難さ

理事 山下 裕久

バリ島観光の道筋で華やかな葬列に会った。盛装の人々が果物・食物を頭に歩む。中ほどの花飾られた棺を男達が担いでいる。棺は十字路で数回ぐるぐる巡り、その都度四方の交通は遮断され車列も止まる。当地では遺体は先ず土葬され、本葬は葬儀の費用を遺族が蓄えた後の好日に行うという。その日は数度の葬列に欧米観光客の群がりがあった。インドでは、車上に花飾られた棺がベナレス川岸の火葬場に向かう様子を、中国九寨溝では、遙か遠くに風葬の旗がたなびくのを眺めたこともある。本州に戻った同期から「田舎の葬式は大変だ。地域総出で、食事や香典受取等の係を決め、喪主は自宅で1週間弔問を受ける」「北海道の葬式は簡単で良い」と聞きもした。土地柄、宗教それぞれである。

東京在住の兄が亡くなった。8ヵ月の闘病、7ヵ月の胃瘻、数度の入院と自宅療養、急の再入院・逝去で葬儀は9日目となった。自宅に戻り、ドライアイスで時を過ごしたが、通夜の日に家造りで棺が出ないという。なんとか出棺して近所の方に見送られ、葬儀は無事終わった。

道内ではこれほど長く葬儀を待つことはないだろう。家の造作・出入りにも余裕がありそうだ。しかし、周囲を見ると、独居や除雪の難などで住いを変える方もいる。そんな矢先、都心のマンションの広告が来た。それなりの価格だが、玄関・居室の動線は折れ曲がり、通路やエレベーターにも余裕はない。首都圏では自宅に戻れず、葬儀待ちの遺体ホテルがあり、葬儀場での冷蔵庫収容もあると言う。終の棲家以前にそのような現実があると知った。

介護保険で主治医等意見書を書く時など、どれほど家族関係や住居を把握しているかと言えば心もとない。

自らといえば、今の所、足腰は立っている。“健康寿命・我家に住める有難さ”をじんわり感じているところである。

